

「あなたが、どうか」

今、毎週水曜の聖書研究祈祷会では、詩編を学んでいます。前回、いよいよ大台 3 桁の詩編 100 編まで辿り着き、あと 3 分の 1 の 50 編を残すところになりました。詩編という書物と言いますか、詩集と言いますか、この 150 もの歌の集まりは、とても感情豊かです。まあ、歌や詩というものは、本来そうですね。理路整然とした論文や、理想や道徳を語る啓蒙書とは根本的に異なるものです。聖書全体は、どちらかと言えば、啓蒙書的な響きが強いと言えます。「信仰者たるもの、こうしなさい」「こうあるべきである」という感じですね。日本基督教団信仰告白の中にも、聖書は「全き知識を我らに与ふる神の言にして、信仰と生活との誤りなき規範なり」とありまして、聖書は私たちの「規範」であることが明言されています。

でも、詩編を読んでいますと、そういう聖書の啓蒙書的な側面、規範的な側面というのが、ちょっとずつ揺らいでくる感じがします。と同時に、信仰者の豊かな情緒と、その豊かな情緒を愛しんで受け止めてくださる神様の懐深さを感じます。詩編は、非常に感情的です。「大人の意に沿う模範解答を述べる子ども」のようではありません。詩編を学んでいると、いつからキリスト教は「模範解答を述べる子ども」になったのだろうか、と不思議に思います。いつから自らの感情を隠して祈るようになったのかと思います。本当は深い恨みや、激しい憤りや、許せない悲しみを持ちつつ、それらを包み隠さず神様に祈るということを、いつからかキリスト教は控えるようになりました。「主の御前では、慎ましく、穏やかに、すべてを受け入れて感謝しなければならない」と教えられ、それができる信仰者こそ素晴らしいとされるようになりました。そして、祈りの言葉は、どんどん神様に付度するものになっていきました。自分の願いとは裏腹に、自分の思いとは正反対のことも、

「きっと、神様はこう言って欲しいんでしょ」と判断し、とても綺麗で上品な祈りを捧げるようになりました。ただ、正確には「神様はこう祈って欲しいんでしょ」という神様への忖度と言うより、キリスト教や教会は、「こう祈った方が良いと思っているんでしょ」という忖度であるかと言えます。私たちは、もしかしたら、神様が最も聞きたいと欲しておられる、私たちの心の叫びを、キリスト教という枠組みや、教会という組織が原因で、自ら歪めているのかも知れません。

これは、完全に私の個人的な意見ですが、昨今のキリスト教の教勢低下についても、多分、ノンクリスチャンの方々が気付いてきたのだと思います。キリスト教と、その教会が、表面的に示す姿と、心の底で願い、欲していることの間、差があるんじゃないか、と。例えば、私たちは「後の者が先になり、先の者が後になる」というマタイによる福音書 20 章 1 節～16 節に書かれた神様の御心を受け入れ、慕いつつ、でも、信仰歴の長さを一つの尺度として、人を称えたり、要職へ着かせる際の基準にしたりしています。また、信仰は、人間の力によって勝ち得るものではなく、神様から与えられるものであることを知りながら、その信仰の長さを個人の力量と結びつけて考えることを続けています。つまり、私たちの正直な願いとしては「こんなにも教会のために、神様のために尽くして生きてきた私を、どうか神様、御心に留めて祝福してください」ということかと思えます。けれど、私たちは、その思いをキリスト教や教会の中で、なかなか表明する機会がないんですよ。そして、そんな本来の願いと、信仰者として見せる態度の間にズレがある状態が、側から見ていて、なんだか不自然に見える、なんだか苦しそうに見える。だから、キリスト教に興味関心を持つ人は減ってきたんじゃないか、と個人的には考えています。

私たちは、礼儀と分別を弁えつつ、でも、もうちょっと正直になっても良いんじゃないでしょうか。「私は、この敦賀教会が好きだから、もっと受洗者を与えてください」と祈ってみても良いでしょう。変に「多くの人たちに福音を届けさせるために」とか「この地に豊かな救いを実現するた

めに」とか回りくどいことを言わず、真っ直に自分の心の声を神様にぶつけてみる。そんな偽りのない祈りの経験から始まる、新しいキリスト教、新しい教会の形もあるんじゃないかと思います。

今日の聖書箇所である詩編 6 編は、他者のことなど微塵も考えられていません。「わたし、わたし」と繰り返し祈り求める自己愛に満ちた歌になっています。さらに言うに事欠いて、神様に向かって「主よ、立ち帰り、わたしの魂を助け出してください」と願います。「私はしんどくて動けないから、神様、あなたがこっちに来てください」ということです。クレームをつけて、サービスマンを呼びつけるような、そんな態度です。そして、もしも神様が良きに計らってくれないなら、「だれもあなたの名を唱えず、だれもあなたに感謝を捧げません」とまで言います。私たちが「主の祈り」の中で毎回捧げている「御名を崇めさせたまえ」とは真逆の言い分ですね。ここまで来ると、現在のキリスト教理解においては暴言と言えるくらいの無茶苦茶な祈りです。

でも、詩編は、隠さず、その祈りを語り残している。聖書は、この暴言に等しい祈りの価値を認めて、「御言葉」として書き残している。私たちは、この事実、真剣に向き合った方が良いと思います。物分かりの良い、本音を隠した、建前だけの祈りに、どれほどの価値があって、神様の耳に届いているのか。人間のはらわたを究めておられる神様の御前において、私たちの調整の施された祈りに、どれほどの意味があって、神様の耳に届いているのか。

神様は、私たちがどれだけ罪深くて、どれだけ身勝手かをよくご存知です。それは、いくら祈りの言葉を整えても、いくら聖書を学んで、こんな風に説教をしたり、証しをしたりしても覆ることはありません。私たちの罪深さと身勝手さを神様は全部お見通しです。だからこそ、悔い改めの祈りと、赦されて生きていることを感謝するという祈りが輝いてくるわけです。神様がお聞きになりたいのは、きっと私たちのお利口さんな祈りではなくて、わがままを自覚して捧げる「こうして欲しいんです！」という祈りと、悪い子であることを認めて捧げる「ごめんなさい」という祈りと、

その祈りが聞き届けられて赦されていることを感謝して捧げる「ありがとう」の祈りだと、私は思います。そして、そんな風に、神様の御前において、自らを晒け出して、全てを受け止めて頂いて、安心して生きている私たち信仰者の姿が、きっと今の世の中に響いていくのではないかと思います。

先週の礼拝でも取り上げましたが、ここ教会は神の国の先取りであります。神の国、つまり、天の国を想像してみると、そこは必ず安心して満たされていると思います。不安で心配な神の国ってありそうにないですよ。そして、多分、その神の国における安心感の源は、「こんな私でも神様は愛してくださる」という信仰と信頼です。だとすれば、神の国の先取りである、私たちの教会も、お互いの至らないところを許し合い、お互いが許されていることを感謝し合う、そんな関係性から生まれる「安心感」を大切にしていきたいと思います。お互いに建前を取り繕って、お互いに敷居を高め合って、お互いに首を絞め合う、そんな息苦しい雰囲気醸すことは避けたいですよ。もちろん、何でもかんでも、なあなあにしまえとは思いませんが、ただ、誰にとってもこの教会がホッと一息付けて、安心できる場所であるように、そのために、私たちも互いに許し合い、認め合うことを続けて参りたいと思います。

そして、なんでも自分で解決してしまおうと思うのではなく、時にはワガママなくらいに「どうか、あなたがやってください」と神様に祈れるくらいの信仰的余裕があっても良いかも知れません。「神様に委ねる」と信じるからには、自分の強さや器用さに固執せず、幼子のように神様に寄り頼むことも忘れないで行きましょう。今週も、神様の御守りが、私たちの努力や働きを大きく超えて、豊かに示されますように。最後にお祈りを致します。

神様。今日も何の功もない私たちを、この礼拝に招いて下さり、ありがとうございます。古の時代から、あなたの信仰者たちは、すべてをお見通しであるあなたに対して、包み隠すことのない祈

りを捧げてきました。今を生きる私たちも、日々抱く様々な思いや感情を、あなたに向かって捧げて参りたいと思います。あなたの御前にあって、私たちがありのままで愛され、取り繕う必要もなく、あなたの恵みを受け取るに相応しい者であると信じて、新たな 1 週間を歩んでゆけますように。私たちに、豊かな信仰と確信をお与えください。そして、赦され、愛されている者の一人として、私たちもまた、隣人に対して、優しく、穏やかに振る舞うことができますように。どうか支え導いてください。今日、行われる敦賀教会幼稚園の運動会に参加する子ども達と教職員が、あなたに守られて、伸びやかに、にこやかに、運動会のひと時を楽しむことが出来ますように。

このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します・